

繪本拾遺信長記

前篇

十

特別

18

2507

10





門 遠  
號 2507  
卷 23-10

繪本拾送信長記初篇卷之十

目録

祇茶門後多減乙之事

小田の家長官位昇進

小田勢風雨と凌ぎ河津浦(寄る)

高田門後多討下回瓶後事

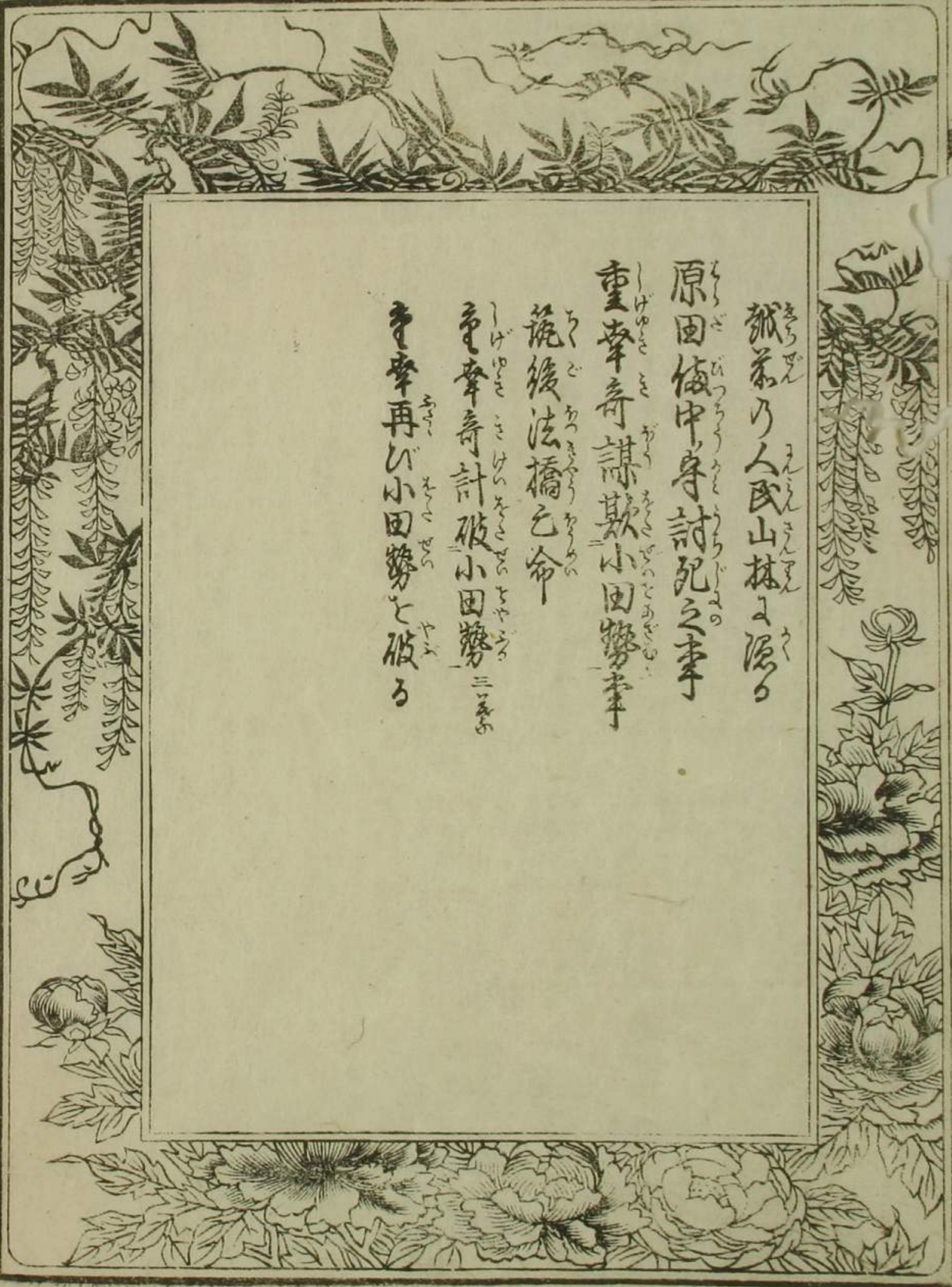
河津為城

重幸奇計破美岩森事

小田信長加減の城々と攻る

繪本拾送信長記初篇





城系の人民山林に居る

原田依中守討死之事

重幸奇謀欺小田勢幸

流後法橋之命

重幸奇計破小田勢

幸幸再び小田勢と破る

繪本拾遺信長記初篇卷之十

城系門後多賊之幸

時又天正三年八月三日信長卿と右大臣又但せらるるべきの勅定あり  
 之れと信長卿退しとてあつるべし積年忠功の臣下(微官と叙し  
 賜りし中)奏願あり別勅許し給ひ柴田檢六郎と後進進し  
 本下及右郎と後系守又但し姓と羽柴と改む河原又玄清ハ肥後守  
 坊九郎右衛門を原田依中守明智十玄清と日田守又但せらるる其  
 外小田の家臣悉く微官を進む八月十二日信長卿城系の一樓  
 退治の爲とて十万余騎の大軍と引陣し敷賀表(表白あり)出陣の  
 要旨を虎杖山の城より中回和泉守指勢本目陣に石田の西光守  
 陣休の城より大町の中へ渡り河原又三郎等籠城し今条中火船の両城







小園の家  
官位日昇進

長言初卷十



去下回籠後法橋具津の城は大坂の香隆寺河津の城に若林長門守  
 龍門寺又三宅隆之丞と守り其外つまらぐの城郭大まは構へ  
 軍勢を教多勢並其体人嚴守りしが容易に丸入せりといふ  
 以て之より十日に日朝より大雨多と覆くるごとく終日終夜小止  
 るく降りしをよむよむの谷川降津津ぬれ人馬の往來も絶えり  
 け附羽柴統元守秀右信長御の御意に如くヤタラひ今日乃大  
 雨川の多場り諸方の往來も止りしれが敵の城に押取し  
 こといりあつた不意に討とんば速なる勝利ありとては其軍  
 勢と引離し河津府中本陣乃城ともと美濃に小園勢の腫と  
 左控くべしと謹で云とれは信長計略甚よしとて即附兵  
 船の用意をばしとるごとくとありは秀右一奮又船に飛入り

河津浦へ漕舟ぬおれ入軍およ明智日向守光秀山崎源太  
 左衛門尉池田伊豫守等物しく教を成の刻斗漕舟と膽拍  
 り揃へて細形後又子の刻は河津浦には若くう秀右下知  
 て兵船悉く教を表漕舟一艘に漕舟は紫ぎとるのみ  
 此秀右にけいし再び船を元の引退ん心は逃んとするもの  
 けいしけ剛又沈と膝痛の名と道とよと鳴り捨く美先又は勢  
 と引離し河津の城はいしと押を周をどんととてうらうら  
 のごとく城中には夜中といひ大雨の時敵を以てしといひし  
 らにむまき藤入の病りしよむひけるき周の夢も押をみ  
 周章ふりき防んとする若くこと中へと發きうらうらの軍兵  
 をや退きの城門と打破り一日は丸入退信く宴例斬敵首



と九の三百余級城若林長門守えんく討つるに搦まは遣  
といつくとしわく落れり相柴明智守物にじりよと歎いひこ  
其疾西の刻斗る三宅撞之懸が勢たる龍門寺の城又押せ是  
且日く攻海三宅をにじり勢城の門後多二百余人切敵道遠  
の左家民屋火をうけ一討又焼まじり火先云よびり階く  
且六日し又本月降の城とにじり其わりの附城も叶いこ  
くん府中とにじり引退きり相柴明智と漆池田等の軍勢路  
又結うけ余は後と討えりて多く又嘆きつる又退後彼不  
又切立加賀城系の門後百姓三子平斬捨れり屍大踏又撲  
倒り又と入なき田系地のに是は後く加賀乃軍民懼は慄く不  
又若狭丹波の國侍信長の下知れぬに教一カ勢の軍兵教多の兵

船又元のう城系の中浦不く又押せ火と放り良家と崩れり  
て死入としり小國勢大又驚き下回院後法橋同和永守等城と捨  
て妙方知りは落れりけ討柴田修羅進勝家いれり子修守一族  
多又同云番元日等刀良等毛受勝々舞卿又又徳山又云勝安右  
進を先じり勢又余入枚討口の城又押せ持橋竹葉を擲る人  
搦にりりて表とるは城又勢甲たる堀の中勢懸隈圖書等叶はじ  
とどの番表切して城門を押用けは柴田が軍勢死入一城の軍民等  
悉く接切は城又火とかけ焼まじり信長諸方の勝軍とて大  
又勇々率以懸とどろ加賀城系の一揆系忽今討已さんそか  
平之去氏男女あきり加賀城西國の者一人もはれ接切は我  
勢懐をとりせよと例の暴悪狝つる頻て下知とせりも其れ幕



小川と回勢  
凡雨と  
暖か  
河津浦へ  
寄る



河津浦へ寄る



下の諸おる長りゆふとほして進もる東田依中守安友修治守  
 多久間其九郎不破河内守二万余人を二子と堀「系修浦三里渡  
 の村」里とと渡して切まりつ又二子の柴田修理進部柴統秀守明  
 智日向守を又即九郎門編系一徹多三万又五人多羽の城と一息と  
 美濃「九郎龍舟橋令津の庄の向」向とゆひく一揆の門後切捨く  
 押通り又二子の摩惠多政九郎門依内務女勝川九郎進多二万余  
 人大野郡と切つぐる是も依く加賀城系の郷民百姓神のき怒を  
 親と多ひふと殺せん然先よ山林へ逃隠ると十万余人の小田の  
 大軍退まはく「安の山彼」西の藪系岩の向本の藪とてとらひ  
 搜「割殺」斬殺とい目し當らぬありとま之系後の坊をゆは  
 和回の中是守大町の寺修治大段の宗光寺石田の西光寺後修治

の拓勝寺川修治左郎天彦若死多の勇士をせしめ殺百人首を  
 刎らと其ふ其孫後殺とて死の求めて殺「壺」寺院坊舎のつと  
 父方り民家高貫の内は隠さるる父は道多若は「切捨たれ  
 記難」雑兵多抄集り「西神」より繩と通「我」百人或り七八十人  
 が一系よ引集り誰某多に切殺し門後百人繩何亦又十繩殺  
 擲とこれを付て帳面は「記」只此の墓とたぐるやう又根系と終し  
 て亡びやとらるる人膽と飛「雪」若穂と夫も今月十八日より十九  
 日又五と討たる坊を首七百餘郷民の首二万二と二百餘切捨  
 ころ男女の殺り幾ふ万との殺をころは宅は信長の幕屋をくは  
 と捨ひ殺をぬい築紂とらるる亦悪と懐る人「され」天正十一年  
 まで死後先秀が弑逆と命と多ひ家名もよ「滅せ」天正十一年

日本信長記巻十



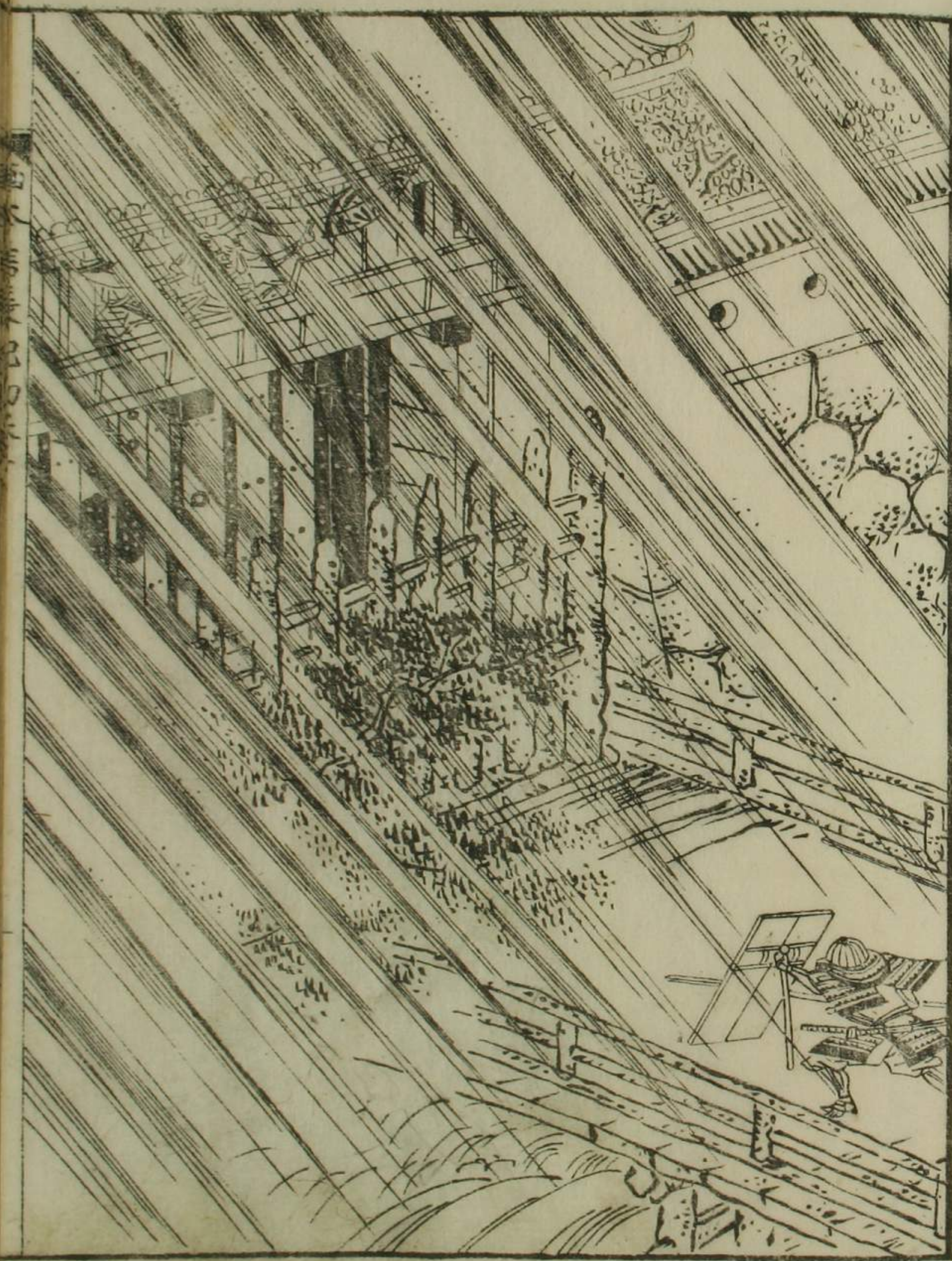
とて佛を運に臨徳と換ふの因よりものり」後代是といはし  
とおどんがみえううに抑加賀城名の両國に去る長身二身か今  
天心三年と九八十八年平教寺の西飲としてに世のよ人街を  
けりせ移し」よ只一附又美云とれ附節別未といやううう  
し次分あり

高田門後討下回籠後事

城名國既又平良」及れ信長御則柴田修理進勝家と小澤道  
の惣管と城」城名一國と場平小庄の城又居くよ府中の城十又  
万石の領地を附摩惠多政左衛門多家又場り九月廿六日故阜  
城又降りとるる安よ平教寺門後の惣大お下回籠後法橋の今  
条の城臨て後山林よとと」幸き命と賜りうう小信長凱陣の

後十月中旬のゆと」が府中の城の傍よ下野村といふあり其所  
のけり又後後法橋乞食の神よありておび居る瓜ん知りう  
若のありて是日村の祿名寺へ告うううけ祿名寺をるる回門  
流の寺るれが城多より平教寺門流の國中又荒濠せると偏極  
えくみえれども平教寺の勢い強き小忠と怒りと押へありうう小  
今度信長が教寺門後を責深ううくとお大きく又教ひ是日村  
下野村中村を納付にケ村のる回門後を集り信長の所方素  
諸大おとこり小平教寺門後の軍民と搜」切敷さんとけう  
されが下回籠後が五石瓜」より近石の門後百人身徳ひかの  
け事と丸圍と遊はし」と罵うう下回籠後今り毛とと押り  
隠しおううろ力引援三に人斬割」若後よ由門て城い」うと大





阿  
理  
落  
機

日本信長記初卷十



勢の百姓八方より巻て修之竹槍を以て突敵し其り称名寺  
の住持依慧大寺小教い其以の守護職柴田修理進(其首を  
差切)ぬ勝家多んで首信長卿の上座又傳人稱名寺へ感状  
と書し其辭又曰く

今度下間後法橋波討捕忠節至法教以其方  
門後係人等不可別候之状如件

修理進勝家

天正三年十月十八日

石田門後黒田村源名寺住持

去りて小旗州石山本教寺より加賀城迄の兩國信長がよに入國  
中の門後多勢なる斬殺せんぬと進く治進しつるし人

と申し申すせ山乃人々大寺小教き加賀院より信長がよに属せは  
勢いよ系して出表へ押来りし小國より兵糧の運送なるし  
方の邊り敵の勢滋より四方の傍とく人より相敵を流し諸  
國の門後と石とる其評文又曰く

今度城居へ敵入のよしけしり出寺の二大方を籠  
城より脱し城より何方に取れりきやうなること付けし  
懸志をそげし一筋より籠城はるる心押の衆中や合  
系とらひあつていよく教しき次第なる人々  
あなうしこ

天正三年八月廿八日

かたどく語めて國へ下らんが諸國の門後大寺小教きと



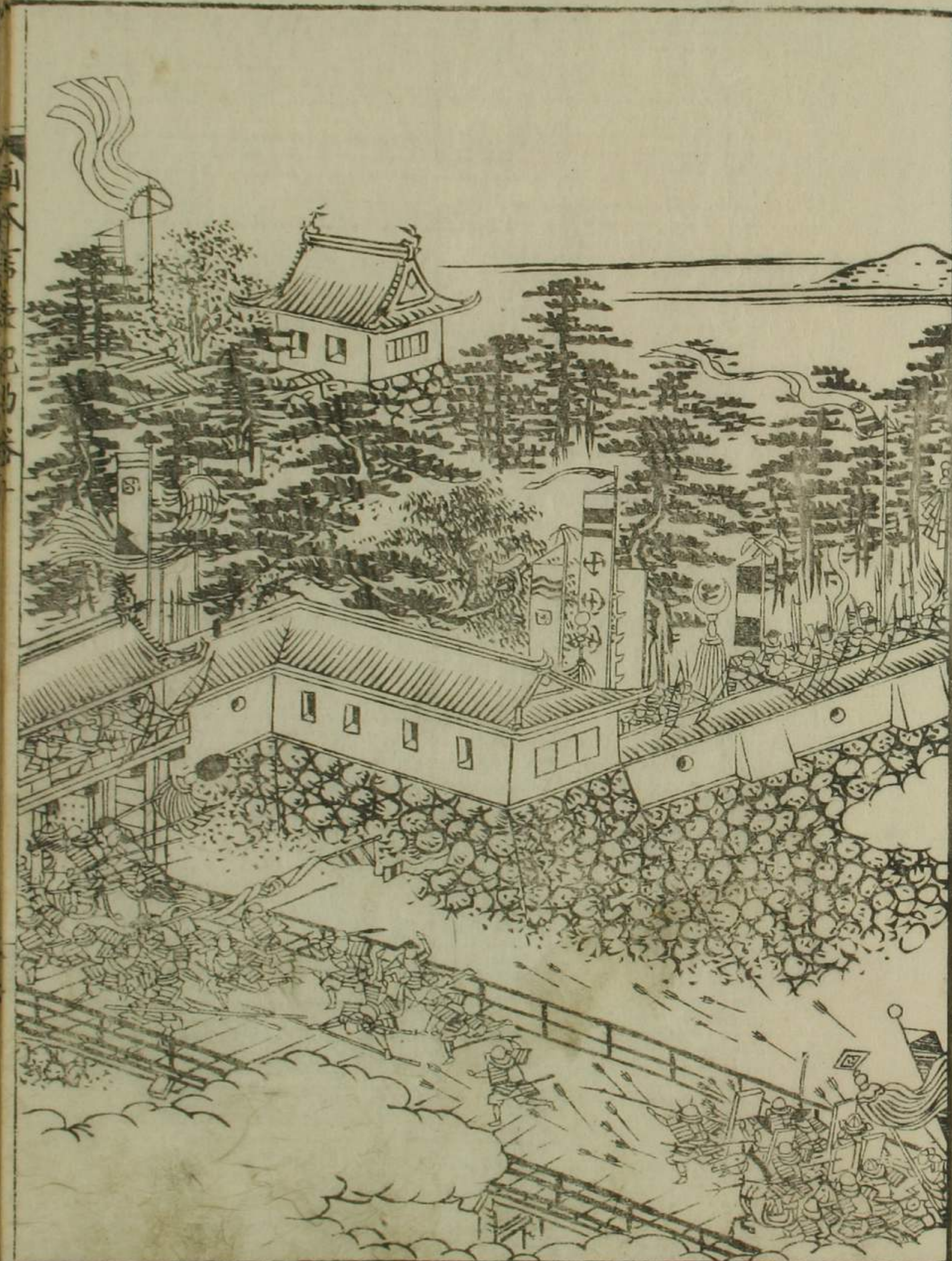
御本寺乃御大寺の御本寺より御本寺と稱し命を捨くは被  
けられたる御本寺の御本寺より御本寺と稱し命を捨くは被  
よ命と稱し命を捨くは被けられたる御本寺の御本寺より御本寺と稱し命を捨くは被  
よ命と稱し命を捨くは被けられたる御本寺の御本寺より御本寺と稱し命を捨くは被

重幸奇計破矣岩齋幸

天正九年の春信長卿正三位右大臣兼持大納言と叙せらるる御本寺の御本寺より御本寺と稱し命を捨くは被  
御本寺の御本寺より御本寺と稱し命を捨くは被けられたる御本寺の御本寺より御本寺と稱し命を捨くは被  
御本寺の御本寺より御本寺と稱し命を捨くは被けられたる御本寺の御本寺より御本寺と稱し命を捨くは被

諸將命とらけ軍兵と列陣し御本寺と稱し命を捨くは被  
御本寺の御本寺より御本寺と稱し命を捨くは被けられたる御本寺の御本寺より御本寺と稱し命を捨くは被  
御本寺の御本寺より御本寺と稱し命を捨くは被けられたる御本寺の御本寺より御本寺と稱し命を捨くは被





小田  
 信長  
 加紙の  
 城  
 美

日本信長言初卷十



父へそ後熱軍巻よせと書りしと下知し終ひ格段として猪子兵  
 从大津信十郎と撰州(と)下さる大坂在陣の諸將信長御の所  
 下知れ侍いさうが本津の砦と書よとく又月三日の曉天より合  
 戦の事苦み定め先陣三好安房和州根来寺の衆後赤和  
 泉河内の國侍おかり其勢六万余人後陣河原田佐中守島山甲  
 斐守と大ねと(と)城大和の地侍を併せ其勢八万余人本津の砦と  
 夷破んと天王寺より押出さるけり先立く本教寺へ漏とさき人  
 多しに於本寺を諸將と集めて議(と)る三津寺の地は敵方の砦と  
 構(兵糧の通路と塞ぎる味方頗る難儀多し)と破りしては敵と  
 追拂(と)しとく先此後國八代の城を相良長門守より討つと  
 合り本津の砦も入城して砦の大ね下向少進志摩に即ち力

を併(と)れ又本津砦を要津右近西人を大ねと(と)後砲の組もよ入  
 百人と取せり奥中の計策と押(と)は(と)後軍の進進とお給り  
 玄祖より小田の先陣三好安房安房万余人只一掃よ本津の砦と攻  
 んと勢ひ猛り押しむ(と)本津の城より相良長門守に百金誘  
 梅鉢の旗朝嵐(と)吹るびうせ砦より八丁余り押し出陣と三好の  
 勢の近付をいさく後砲をおかけ夫と飛せ我を憚(と)る(と)三好安房  
 方の兵士と取り(と)て敵兵小勢よと城と出戦いとおん(と)は(と)自  
 伝を左の(と)配たり只ま(と)る(と)討て(と)り切崩(と)し(と)附入(と)し(と)余  
 為せやと自ら書先(と)槍と(と)げ敵の傷(と)入(と)る(と)双方(と)度(と)用  
 を懼り鎗槍(と)や(と)り(と)め(と)る(と)合(と)て(と)我(と)より(と)相良長門守(と)率  
 と(と)知(と)し(と)留(と)く(と)交(と)り(と)我(と)に(と)が(と)仍(と)り(と)負(と)て(と)引(と)退(と)くと(と)三(と)好(と)勢(と)勝(と)よ

画本信長記初卷十



有り遊兵はしと侮人亂して退りたりけりけり源き活殺しく  
 みく葦芦邊回りて生後里去地番内の者とり人も討して  
 三方角と矢ふ多双悪本之三好軍兵遊ちを退りけり引入  
 らし刻へ島の敵相良が勢のつぐよ遊しや其の本と見あひこり  
 いうふとあきれりうふ忽一夢の鉄炮耳元は御着きく後の上の下間  
 少進日宮内卿勢のまぶらりてとみと葦の中より開と他向く  
 討てり内美若森大さふ勢き敵の謀りよ落るるをけ敵を切  
 崩二足もあく退けよといらりり下細とるは本に美若森退し  
 相良長門守とひりよりぬ右の方より開と他つて切てくる三好  
 勢いよく勢きいりりせんとなめらりり西の方川口は傍て一帯  
 の細道あり溪辺の方より溪師二人細とるは本に美若森退しけり合

敵の形勢は仰はし再びみをかし溪辺の方へ進りり矢若森  
 是と見りりりるより溪へ出度場とて敵へよく諸軍をよむし  
 彼細ると押合踏合引りて後より相良下間が両勢のぶじと退  
 討やふ死傷の者殺をまじはゆはして二丁身引はしとあみ一  
 船の小はあり三好軍勢は川馬と打ち入後えんとつせれた川屋  
 匠去海して人馬の足煮く沈とるよ動くも放り後より味  
 方の勢跡かよるよかきりりきり踏倒され推搦さる死る者殺し  
 時又川より数十艘の小船と鉄炮をいしと並べも人の大船  
 端小船と出本川の岩と死り守る志摩本に即安よ在てはるを  
 竹るの文し遊り刀とてて佛討ととひこれと敵百の鉄炮一つ人  
 二切て敵ち槍をいり突まよば後より相良下間軍兵はつると





山林の人民  
あつたんえ  
あつたんえ

山林の人民



幸切倒一人も余はなと掃合せし難わが小三好が大勢大討と  
 するもこれには馬と打入るを躍らせ遣わんと身を掃むる忽  
 凡より火と打ち合はるる声一日も焼く火先天と貴き軍  
 地と打ち合はるる勢は焼く煙と交り斬り煙とむせび返り  
 打ち合はるる中らと始り六人余一人と打ち合はるる  
 命合く遣はるる者漸く十人へはなれり  
 又討り入りつると良きと助けらるる體也も取捨赤裸とあり奉  
 るも逃ぎつりしが槍底鉄炮底焼傷るるを身内を傷らるる  
 ぐりあくる天王寺へ引つるに足踏し切りつるありまかり

原田信守討死事

去程又後陣は相つる原田信守畠山甲斐守の先陣の善信

るべきを心えり軍勢を引て進み勢も味方も何地へ討しや  
 産まばいよく候と馳せりわが小三好原の中は周の善信と紀  
 原煙立よりて合戦のありまするに南無三寶先陣の謀計は  
 隔りつる馳せりわが小三好と勢を奪るる彼苦の中へ一系  
 に入つるわが小三好の珍本を奪るる知と受け畠山信守の  
 西人鉄炮の組は一又百人は死に埋伏し後陣の敵と居居け  
 と討入るとは元来不意のありしに原田島山軍勢一又百人は  
 く討倒され表とむし原田信守胸板と二石打接し  
 も殺死しつる原田の良きも三郎其浦を石橋門に討倒し  
 池田と森本勝次も人の討死を死に今我々が死するに



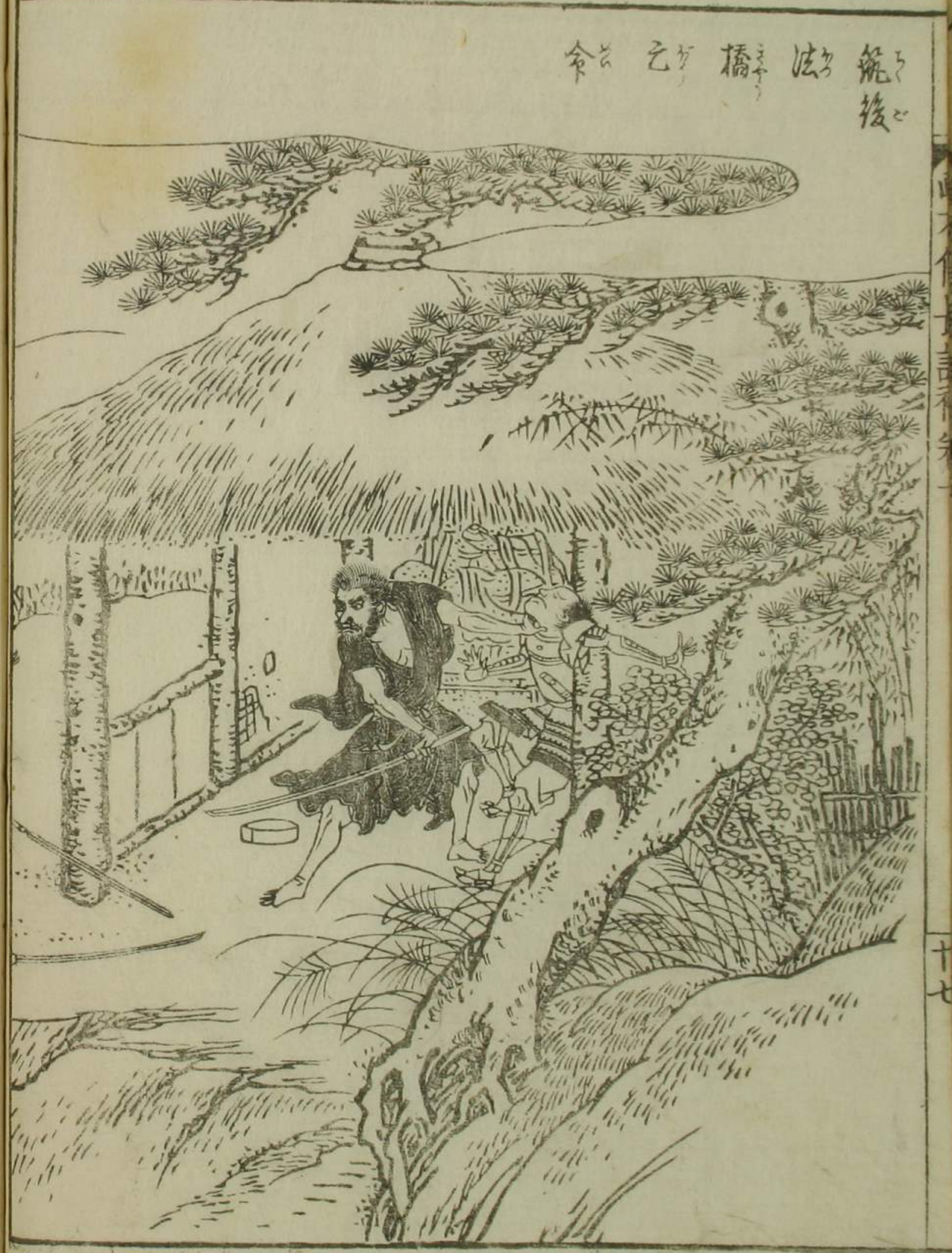
敵無りぬいと来りて石山勢の志中へ面もろくに切入て火と  
 りしに戦ひしが後一人もあらず討死し義名と後代にのこし  
 たる島山甲斐守の乱る味方と列せしめ且我ひ且走ると石山勢  
 遠ざくと退討せしむ討死に負敷と知りぬえんぐりあて天王寺  
 へ引えたる石山勢も長退して不足とせると是も軍兵と引上  
 勢勝勝周をとて本陣の世も(勢)やとる

多事奇謀欺小回勢事

け附小回右大お信長御在座しておしとろふ本願寺のあまの返軍  
 し原田信守討死のよし具又浪進中々し信長大に勢もきせり  
 終ひ坊主農民の分際として在外の働き勝りあうに我自ら地  
 向きと忽ち又表に(多)事来の遠眼と暗に(世)して即附陣

ありて又月又日京都とまゝ其日河内の若くは若陣(あ)ま  
 三万余騎の軍勢と(記)坂の津より信吉が経て天王寺に若  
 し終ふ本願寺も信長自ら軍勢を引て向ひ来りは(ま)い  
 清ねと集り軍の陣後さまぐ(附)下回兼藤と(ま)出てやけ  
 ろい信長今度南地(後)向せり我度の返軍と勝り勝負と一奉  
 又(世)んと(記)し(合)戦(さ)す(き)方(り)我(の)防(禦)せ(ん)は(忽)ち(島)  
 嶽(あ)破(ら)し(宗)門(長)く(勢)減(ら)し(宣)表(計)略(と)ら(せ)し(敵)兵(と)  
 退(く)る(方)便(と)そ(ら)し(ま)し(た)れ(と)ヤ(ろ)ろ(小)松(本)寺(幸)完(亦)し  
 て(某)の(ひ)て(り)謀(略)と(は)我(れ)が(あ)ま(の)大(軍)徴(歴)又(か)し  
 向(く)い(信)長(を)討(て)て(法)教(の)根(と)勢(は)強(て)心(を)引(ひ)終(ふ)  
 又(及)び(と)一(族)於(本)孫(市)龜(井)六(郎)を(討)て(計)策(と)授(け)紀







州表(急)せ三番定(坊)又何申(人)計議(志)し合(て)板(に)方  
の持(り)く(軍)勢(の)配(り)弓(鉄)炮(と)備(へ)今(や)等(と)持(り)けり  
附(又)月(八)日(曉)天(信)長(が)大(軍)王(寺)より(押)出(し)本(郡)寺(の)  
南(ふ)よ(仕)寄(る)先(陣)い(ま)久(向)右(邊)門(耐)松(永)彈(心)通(長)園  
兵(部)少(輔)二(陣)い(勢)川(右)進(咎)監(野)兵(庫)限(を)又(即)左(邊)門(耐)掃  
系(修)禱(守)氏(家)左(系)高(安)反(平)左(邊)門(耐)計(多)惣(三)郎(三)陣(と)  
信(長)御(旗)本(馬)出(り)惣(勢)九(三)万(五)百(餘)人(問)の(夢)天(地)と(勅)りし  
廣(く)と(攻)め(鉄)炮(を)打(り)け(矢)と(砲)と(の)條(と)亂(れ)が(て)く(燃)  
中(の)兵(狭)間(と)困(り)唱(と)志(し)め(寄)卒(が)お(圍)と(持)寄(る)の(軍)兵  
我(一)と(柵)と(引)の(け)逆(成)本(と)側(に)據(裏)よ(左)付(態)を(健)強(と)引(け)  
く(急)入(人)と(し)ろ(る)形(に)寄(率)附(かい)は(し)とお(圍)の(鉄)炮(と)砲(矢)や

否(や)困(り)ろ(換)間(を)一(日)と(圍)し(用)き(構)へ(出)ろ(鉄)炮(の)符(先)と(並)  
て(打)出(し)鎗(長)刀(の)長(柄)を(以)て(據)え(附)ろ(寄)る(者)と(ぞ)ろ(く  
と(衝)落(し)爰(と)冷(途)と(防)き(丸)が(寄)る(の)軍(兵)忽(二)百(餘)斗(り)  
討(殺)され(り)死(す)る(は)寸(余)り(人)な(ら)ず(り)て(引)け(り)信(長)  
後(陣)い(ま)く(け)あり(と)ま(を)力(ん)ぜ(し)き(ろ)る(き)若(虎)の(ろ)る(ま)ひ(る)る  
先(陣)二(陣)一(より)あり(至)三(五)三(より)責(入)や(退)く(若)矣(殺)さん(と)采  
配(お)ろ(り)知(れ)し(が)諸(軍)是(より)勵(ま)れ(る)い(く)意(を)そ(ろ)り(上)げて  
ろ(づ)と(は)ま(す)責(さ)る(機)中(に)爰(そ)一(世)の(大)る(之)宗(旨)の(お)ひ(と)令  
と(捨)て(防)げ(や)と(互)い(は)し(林)あり(ら)し(令)限(り)又(戰)へ(兩)方(の)  
負(勝)く(し)門(扉)ぎ(き)く(り)久(ざ)り(ろ)附(よ)太(右)前(の)南(橋)も(難)  
兵(一)人(死)ば(は)す(春)ま(て)中(々)り(備)山(の)門(至)如(し)人(考)る(乃)所

画本信長記校卷十

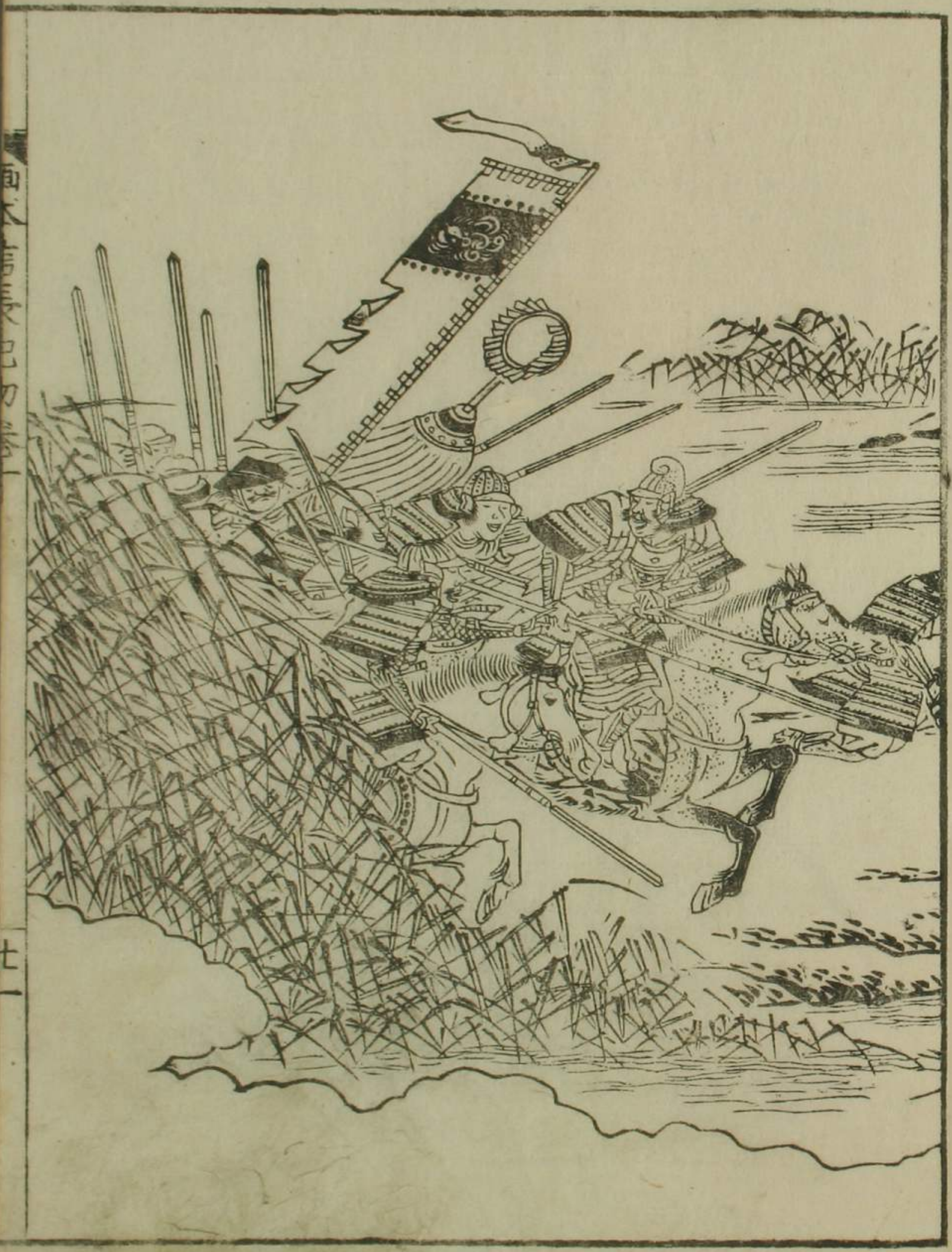
十八



大信長云一言やべきのひてけ矢倉へゆくといけ大信長軍へ  
 達せらるる對面ありて終つるべしと叫りてせ給本軍幸が下知と  
 ちて三番定む方面貌格好と人よりくぬりてく織の匠七  
 糸の袈裟水晶の念珠を拵十余人の僧衆と引合し伴の矢倉へ  
 出られぬ者子の兵士といと人の知りてとぞと鉄炮と止め信長  
 御かくしと云は信長守て盗人坊を何れをを云んととらやせ  
 及び鉄炮を打殺せと中絶し終つて多々久間信盛傳へて  
 中絶せし鉄炮陣はゆく一ととやんとあふ飛るやうて打  
 殺さんい君の威光おるたはぬり其術名代は出何るや兼  
 其る細よよ門てゆきうう小美崩し終つるべし信長云と是又  
 日し多々久間をひて其云不ぬばしゆ終る信盛馬よ打のり陣

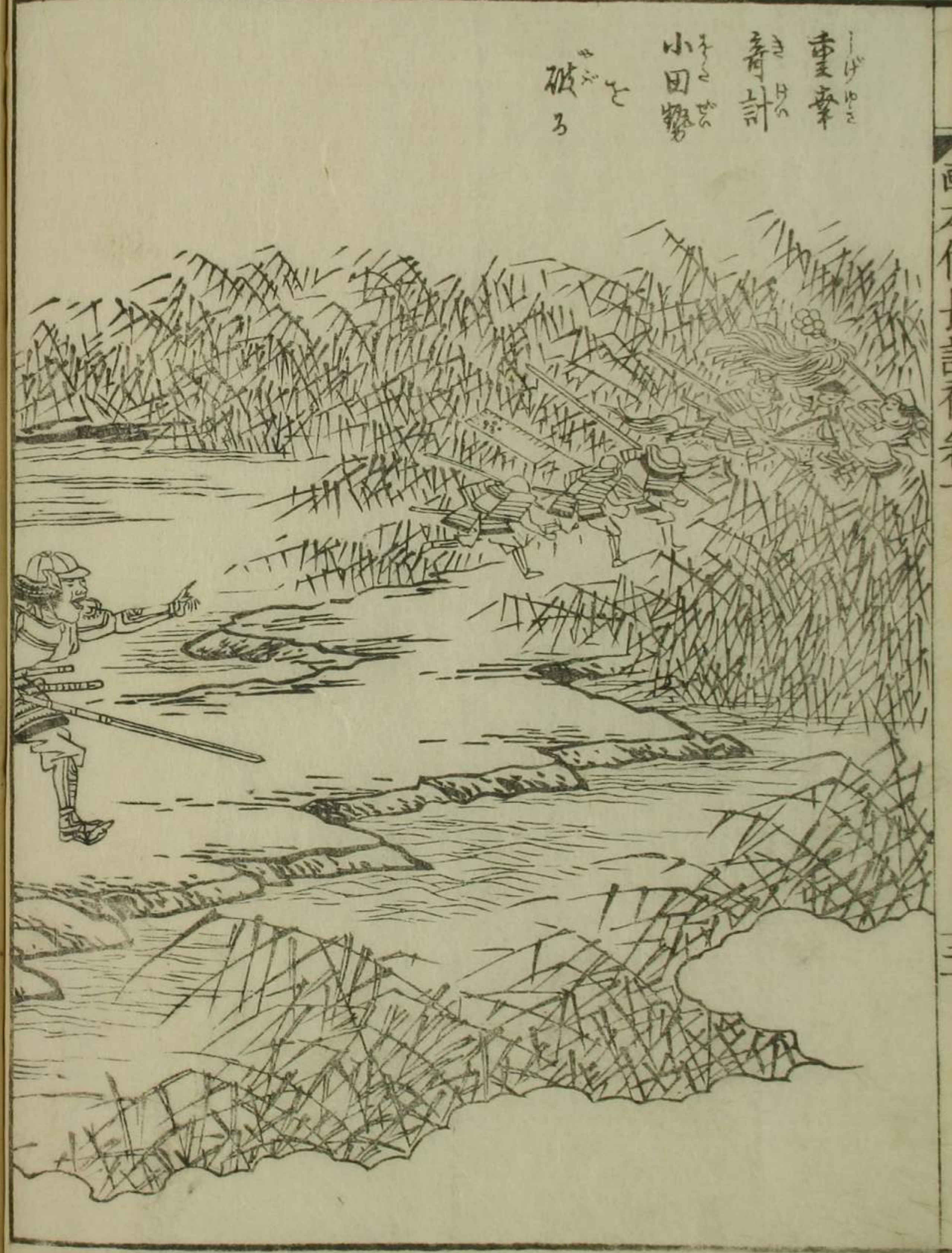
前に出く多々久間右衛門尉大信の代代として安よ未とうと人  
 の云不某うけ終りて云はは速くやされけけ附空坊  
 夢を云くし出守元祖親家と人弘通ありて以来とて  
 三百余歳代々天の軍も信仰はしし勅教不しと今も  
 終かくれどし終るを信長一人我宗門と悪く終ひ去る元龜  
 元年より天正の今も門て七ヶ年が同軍馬と向らまは勢乃  
 討死致きては終余りけり終る元龜徳勝しとやせども宗門  
 死守の外國法を起し罷と得べき是はは信の終るを國賊  
 を好む國郡と事なる元龜謂もいり信長御も美崩しは宗  
 門承く退將せんを致き止りて終るは終るは終るは終るは  
 討死も負致し我たましく釋門よ生と得るがう衆生の苦惱





圖本傳長吉神卷

十一



重幸  
奇計  
小田  
破る

圖本傳長吉神卷

十一





其二







其三

圖本傳長言補卷十

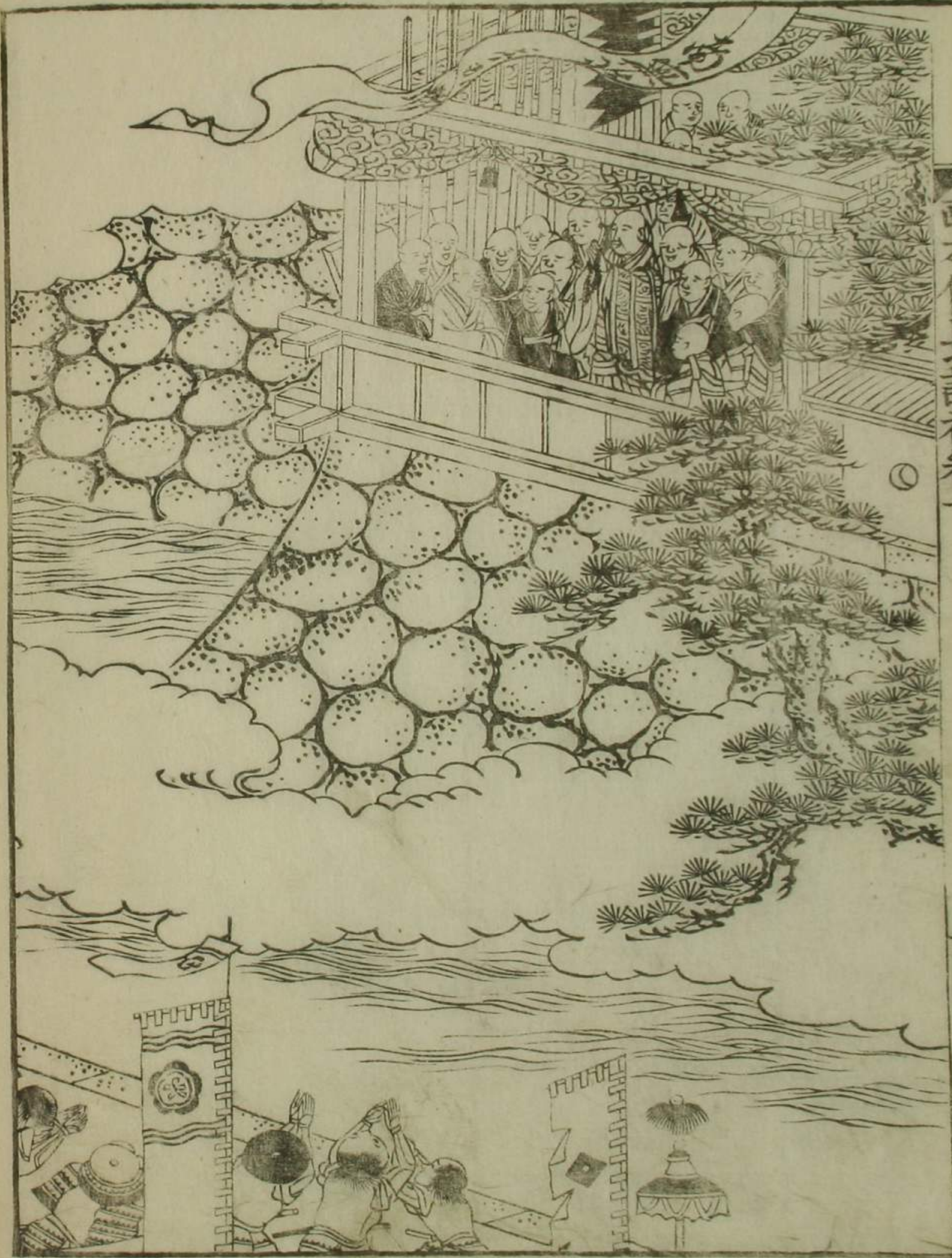


と敵の軍は然りば修羅國軍の中又踰りしむるも未竟の如く  
 降はしく是れは有りし信長御免大の仁心を以て是れを  
 人を殺し門後の軍が一令と助け軍勢と退けて京門と立居たま  
 ひるばはる難き名根をうんとどけしをやさんぬ身は海に流し我  
 言と難達みば其間今朝より歌味方討死の者未竟成佛の志  
 佛やさんと西に向つて合掌し無情と曰るは南無阿弥陀佛くと  
 るらう小唄人給へおのの中より一向宗の門後の者たつた難  
 や勿論や歌味方の我くと助け救ふとの大慈悲は如來の御心  
 うでうぬ乃立べきぞ逆羅羅き我く後世の如こそ思はし  
 と鉄炮弓矢と大地よ投とそ多分合せく後々れば宗命あり  
 ざる軍兵ましく是れに殊勝の一人ありたまや宣ふあり難し

信長合掌を佛とれは多々回信堂大き小圍り急ぎ信長御へ  
 かくと云とれは信長大は好し給ひ悪き味方の難兵亦勇僧  
 坊主が舌尻欺と我り給ひ用ひざること奇怪なり急佛を中  
 必承悉く斬殺し如坊主と鉄炮をてお倒し一息又一山と宗  
 やと陣中驚く大夢と烈しく下知とほし給へは争り雄の若者  
 七八十跨り鉄炮を引上げて大に弛ゆるを一向宗の難兵亦  
 竹先よ立ちまがり佛の脈と殺せんとは悪魔外石のありし  
 さいさせはじと捆とありは討死を及びたりけ耐守中又撞り  
 者ころくと御書きて矢倉くは管弦を奏とれは定む坊衆  
 傍と矢口は善く管弦の律よ合せ浄土和讃と誦しりりたる  
 是れくは難くおのの軍兵將又踏し心と徹し大地は流るる



しげやま  
重幸再び  
小田勢と破



西本信長言不卷一



崇しやう正せい南なん五ご阿あ彌み陀た佛ぶつくくとく一いつ白はく心しん之の稱しょう名な也なり 乃すなは々ち 乃すなは々ち

繪本拾遺信長記初篇卷之十六尾



